

安全への提言

|||||

安全の新しい常識

ます だ まする
増 田 優[†]

常識は安心の基盤であり、安全の程度は常識の水準に依拠する。日本は強い現場力を背景に欧米諸国に比べて遜色のない安全状況を達成した。しかし、近年事故が多発し陰りが生じている。安全に係る常識を再確認し現場力の再構築を図ることが重要であることは論を待たない。これに加えて、新しい戦略的な思考や体系的な取組みによって、より高い水準の常識を創造することが必要ではなからうか。1980年代から化学物質総合管理という概念を提唱してきた。化学物質総合管理の中に安全の新しい常識の芽を見つけてみた。

化学物質の管理も当初は個々の事故や事件が契機であった。そしてその視点は、労働者の安全、消費者の安全というように個別的であった。しかし、国際的な論議が本格化する中で、化学物質を適切に管理していく上で重要な諸原則が確認され、戦略的にして総合的な統合された体系が構築されてきた。今日、化学物質総合管理の全体像がほぼ明らかになり、具体的な課題や時間的な枠組みも見えてきた。先進国のみならず多くの開発途上国でも、化学物質総合管理の考え方を基礎に体制の整備が急速に進んでいる。

化学物質総合管理の目標は、科学的知見に基づいて論理的に思考することにより、化学物質のもたらすリスクを適切な水準に管理し、危害を未然に防止して心身ともに無事な状態を確保すること、すなわち安全を確保することである。加えて、制度や規範を確立し、かつ、情報の共有化を図ることによって、安全を確保している状況を納得し信頼できる状態を醸成すること、すなわち安心を醸成することである。

そして化学物質総合管理の基本は、すべての化学物質のすべての特性を科学的方法によって把握し、すべての視点からすべての用途についてリスクを評価し、開発・生産から使用・廃棄まですべての段階についてすべての者がそれぞれの役割を果たしつつリスクを管理することである。科学的知見を基に論理的に思考してシナリオを設定しながら行動することによって、すなわち、戦略的に管理し活動することによって、危害を未然に防止することができる。

そのためにはより多くを知る努力と知識の共有化が重要である。事前に知っていれば自発的に注意しながら行動できる。いざというときの対応も早くなる。情報を共有化することによって、各段階のそれぞれの関係者が適切に管理することを促進し、管理活動を社会全体に広く展開することができる。

近年、この点の論議が急速に進展している。化学物

質の有害性に関する科学的知見を安全性データシート(SDS)や国際統一表示(GHS)によって提供し共有化するだけでなく、暴露状況に関する科学的知見についてもOECDの排出シナリオ文書(ESD)のような暴露評価書として共有化する論議が急展開している。化学物質の流れに沿って、上流から下流へハザード(有害性)情報が流れ、逆に暴露情報が川下から川上に流れる。情報の相互交流により認識の共有化が進化する。

医療の世界において説明と同意を医療行為の前提条件とするインフォームド・コンセントが強く求められている。同様に事業者間で「知らせた上で売り同意を得た範囲内で使ってもらおう」、そして「知った上で買い同意した範囲内で使う」のが当然という時代がくる。事業者と働く者との関係も「リスクを説明し同意の上で働く」という間柄になる。諸々の関係がこのように変化して、安全の新しい常識が形成されていく。この潮流は、決して化学物質総合管理の世界だけではなく、広く安全に係るすべての分野において進展していく。

こうした社会においては二つの事柄が重要度を増す。一つは知識の質と量である。より多くを知る努力、科学的知見を充実する努力が欠かせない。加えて、知識を集大成・体系化して使い勝手の良い知識基盤を整備する努力が必須である。二つ目は知識を受け取り活用する者の質と量である。科学的知見の理解力と論理的な思考力・認識力を高める必要がある。専門職業人の育成に加えて、社会全体の認識水準の向上のために教育が重要である。いずれも体系的に取り組みなければならない、21世紀の安全に係る常識の水準を決定する重要な課題である。

かねてから、無機化学、有機化学などと全く同様に、大学1年生の時から化学物質の生物学的特性や有害性に関して学習しこれを上手に管理していく術を学ぶ機会、さらに法律や自主管理といった規範について学ぶ機会が必要であると主張してきた。そしてささやかな試みとして「化学生物総合管理の再教育講座」(<http://www.ocha.ac.jp/koukai/saikyouiku/>)を開講した。90分授業15回を1科目として2005年度前期、後期それぞれ28科目開講した。前期だけでも625人の方々それぞれが15回も毎週毎週足を運んでくださった。それも90%以上が、日々忙しい20歳代から50歳代の現役世代の方々である。

社会は、21世紀にふさわしい知識基盤の整備や人材の育成・教育を強く求めている。こうした試みを通して科学的知見と論理的思考に基づく安全の新しい常識が創り出されていく。

† お茶の水女子大学：〒112-5610 東京都文京区大塚2-1-1